人間のライフサイクルの特徴—「家庭学」のための予備的考察

神戸学院大学　石﨑淳一

筆者は人間のライフサイクルのもつ特徴について論じてきた（石﨑，2011，2015）。人間のライフサイクルについては、心理学や精神医学において論じられてきたが、必ずしも多くのことが明らかになっているとは言えないであろう。筆者がライフサイクルについて注目するようになったのは、人間の特徴を「家庭を形成する存在」と考えたためである。そのような問題意識の中では当然、人間の家庭形成を可能にしている生物学的属性についても無視することはできないからである。実はこのような問題意識は人類学者の一部に見られる。かれらは進化論の立場から霊長類を研究し、その中で人間の家族形成を解明しようとしている。

筆者は人類学者が提起する問題を別の観点から解釈しようとするものである。それは、米国の一部の科学者が Intelligent Design Theory (ID 理論)を提起したのに似ている。かれらは生物学者や天体物理学者の立場で生物や宇宙、地球のもつデザイン性について、これまでの進化論的な議論とは違う観点から解釈しようとする。それをあえて一言で表現すれば、生物や宇宙、地球というものを無神論的、非合目的な存在としてではなく、有神論的、合目的な—デザインされた—存在という観点から捉えなおす、という試みである（渡辺，2005）。ＩＤは宇宙と地球、生命に関するデザインされたものとしての議論を提起するが、本稿はいわば人間の生涯と家庭形成に関するデザイン性、目的性について考えようとするものである。

1. 人間のライフサイクルとその特徴

はじめに人間の生涯を 8 つの時期に区分して人格（パーソナリティ）の生涯発達を示したエリクソンのライフサイクルの図式を示す（図 1）（エリクソン，1997）。ここでは 8 つの区分自体の妥当性などについては論じない。人間の人生（人格）は常に成長し続けるものであること、それにはある程度のステージ（段階）があること、各ステージにおいて心理的な課題を達成しなければならないこと、などを確認しておく。特に注目しておきたいのは、乳児期、青年期、老年期である。乳児期は自我が「基本的信頼」を獲得すべき時期であり、青年期は「アイデンティティ」を確立すべき時期である。そして老年期は、死を前にして自身の人生を心理的に整理・統合するとともに、自分が獲得したものを次世代へ継承を図る時期である。

さらに、人類学者のラブジョイによる霊長類の生涯の各相の図を示す（図 2）（エックルス，1989）。この図は胎児期の長さと生後の各相の長さが比例していることを示そうとしたものである。ここでは胎児期のことは論じない。ヒトにのみ生殖期間後の期間があることに注目する。このためにヒトはさらに寿命が長くなっていることを確認しておく。

本稿では、この 2 つのライフサイクルの図式を基本に、さらに詳しく人間のライフサイクルの特徴を見るために日本を代表する人類学者で霊長類学の立場から人間の社会について多くの考察を発表している山極寿一の議論を取りあげ、それに対する筆者の見解を述べて行く。

表 1 は、「類人猿の性と繁殖に関わる特徴」を示している（山極，2008）。ここでは、特に出産間隔および性的休止期に注目する。ヒトでは、性的休止期は明確でなく、女性は続けて妊娠、出産が可能であることが示されている。他の類人猿ではそうではない。

表 2 は、「霊長類の生涯の各相（ヒト上科の生活史）」を山極の観点から示したものである（山極、2008）。ここでは、ヒトにのみ「子ども期」、「青年期」が存在し、また老年期がきわめて長いことが示されている。

そして山極寿一は、「人類の生活史（ライフサイクル＝引用者）は三つの不思議な特徴をもつ」と指摘する。それは、次のとおりである。

① 離乳してもおとなの食物が食べられない「子ども期」の存在
② 体が成熟しているのに繁殖にまだ参与できない「青年期」
③ 繁殖を終えてから迎える「老年期」の存在

以下、それぞれの時期の意味について考えてみる。

2.「子ども期」について

この時期の存在理由について、山極は次のように論じている。

人間の子どもの永久歯が生えてくるのは 6 歳からで、それまでは大人と同じような固いものは食べられない。これは離乳とともに大人と同じように野生の食物を独力で探し、食べられる（ある程度は自立していると考えられる）類人猿と異なる。

このような「子ども期」が存在するのは、人間の脳が生後の長い時間をかけてきわめて大きな成長を達成するためであろう。類人猿では新生児の脳の大きさは大人の約半分であり、4 歳でほぼ大人の大きさに達するのに対して、人間では 4 分の 1 以下であり、5 歳で大人の脳の 9 割に達し、10 歳で等しくなる。脳はひじょうに大きなエネルギーを消費する器官であるので、この間は脳の成長にエネルギーの大きな割合を割いている時期だと考えられる。

以上が、山極の説明である。

捕食と母親の授乳という人類学的な観点からは、霊長類の中で人間にのみ「子ども期」が存在するという議論である。人間では離乳の時期は比較的早いということが示され、これは母親の出産間隔が短いことと一致し、年齢の近い兄弟をもつことを可能にしている。チンパンジーであれば、兄弟は 5 歳ほど離れていることになる。すなわち、母親から上の子の手が離れ、次の子をもうけることができる。

山崎は人間の脳が大きいことを「子ども期」の存在の理由としているが、5 歳で 9 割に達しており、しかし永久歯はまだ生えてこない、という状態にあり、人間に固有の子ども期を脳の成長にエネルギーを消費しているから、という議論はあまり説明に成功していない。

人間の場合、後に論じられるように養育を母親だけが担う必要がないので、ケアを必要とする無力な乳幼児を同時に養育することが可能である。ペットのネコやイヌが一回の出産で数匹の子どもを生むので、一回に普通一人だけしか生まない人間は多産であるように思われないが、霊長類の中では多産である（ことが可能である）。やはり神は「産めよ、殖やせよ」と願われたと考えられる。人間の子どもが養育者に依存的な時期がきわめて長いことは、無償の愛によって愛される期間が長いことを意味する。そして脳が発達していくこの時期は、養育者との安定的なアタッチメント形成の時期と考えられる。これは脳科学の側からも支持されている（Siegel, 2012）。

ところで、現代は核家族化が進み、母親の子育ては心理的にも大きなストレスとなっていることが報告されている。ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒでは、心理社会的なストレスの階層表を提示していたが、そこでは「第一子の誕生」は「離婚」と並んで重度のストレス・イベントとされていた。人間の赤ん坊はきわめて無力で、養育には労力を要するので、おそらく母親の無償の愛が期待されているだけではなく、本来は父親やその両親、兄弟ほかの親族、また近隣の人々が共同で養育を援助することが期待されているのが、人間の子育てなのであろうと思われる。

これはむしろ「子ども期」以前の乳児のことなのだが、人間の赤ん坊が激しく泣くことが特徴的であろう。その声は大人にとって刺激体となって、無視できないものであると小児精神科医は言う（渡辺，2008）。これは類人猿には見られないものであろう。そして、養育のプロセスは、養育する大人に無意識的な被養育体験の想起をさせるプロセスでもあると考えられる。ここに養育を通した相互作用のパターンの世代間伝達が成立する基盤がある。人間の乳児が養育者との間にいかに繊細な感情（愛情）の相互作用を積極的に実現しているか、ということは現代の乳児研究が明らかにしたことである。子どもは無償の愛を感じながら育つが、親も同時に自分が無償の愛で愛されたことを思い出す。そ

の感謝の思いに自分の愛を加えて子に与える。それは祖先から続いてきた命と愛の連鎖である。命の繋がりが続く限り、こうして新たに加えられた親の愛が世代を継ぐごとに雪だるま式に無限に増えていくのである！しかし、現実には無償の愛で愛し、愛される体験が全てではないであろう。この場合、愛されなかった、あるいは利己的な要素のある愛を受けるならば、その心の傷や歪んだアタッチメントのパターンが世代を継承する中で繰り返される可能性が高まることになる。

「子ども期」の存在は、今後、人間の発達における幼児期の意義として、もっと詳細に理解されるべきである。

2.「青年期」について

これは、年齢的には思春期の時代であるが、性的に成熟しつつある期間ということでは、類人猿にもある。実際、山極は「青年期」の存在理由についても年齢による脳の成長の仕方を理由として挙げ、人間には「思春期スパート」があると言うものの、一方でこれは人間だけではないことが分かってきたとも述べている。進化論的な議論は、ある現象を人間にユニークな特徴であると認めて、人間がなぜそのような進化を遂げたのかを推論するために動物としての人間に近縁のサルに類似の現象を求めるため、現象を分析する議論自体は有意義だが目的論的には還元主義的議論の限界をもつ。

エリクソンは青年期の課題をアイデンティティの確立であると言った。この時期に人間は原家族を離れ、心理的に独立した個人として出発する。そして、社会に出て配偶者を見つけ、新たに家庭を築き、子どもを残していく。山極のような人類学者によって、サル的な群れ（集団）を形成する一方で、一夫一婦のつがいの形をとるというのが、人間の社会のユニークな点であると指摘されているが、この家庭形成の準備の期間として、性的な行動を抑制して利他的な人格を成長させるというセルフコントロールの責任分担は人間にのみ与えられた。聖書の教えに擬えれば、アダムとエバが与えられた神からの「戒め」を守り、いわば神の子としてのアイデンティティを確立すべきステージが青年期の課題であると考えられる。

ここで言う「青年期」は、いわば子どもと大人の中間の時期が存在するということだが、人間の特に性的活動における未完成、未成熟の段階と考えられる。その年齢は、例えば英語のティーンエイジャーという言葉の区分にしたがえば13 歳～19 歳のころであると考えられる。エリクソンの青年期はこれに近いように思われるが、現代社会で一般に考えられている青年の時期はもう少し幅が広く 20 代から 30 代を含むこともあるであろう。それよりは幅が狭く、だいぶ若い年代のように思われる。青年期を人格的な結婚前の準備期間と捉えている本

稿の立場では、このような年齢が青年期であるとするならば、青年が社会に出て行ってやがて配偶者を見つけるといよりは、社会に出ていくころにはすでに配偶者を決めていく、というモデルが提起されるべきであると考えられる。これは個々人が配偶者を探す現代的な結婚の仕方というよりは、適齢期になるころに共同体の中で関係者らが共に配偶者を探すという伝統的な形の昔の結婚の仕方に近いように思われる。

「思春期」、「青年期」の人間のライフサイクルにおける特別な意義についても、われわれはもっと明確に理解する必要があるであろう。

また、それは人間における性的規範の意味を考えることと強く結びついているが、この性的規範が大きく揺らいでいる現代社会の思想的背景として、統一思想の立場からマルクス主義、ダーウィン主義、フロイト主義が挙げられ、それらの共通性が指摘さている（李，1997）。今日、家庭の崩壊はなお進行していると考えられ、これらの思想的影響について引き続き批判的に分析し、社会的、文化的に克服していくことが求められるであろう。

3.「高齢期」について

本稿は老年期と言わず、高齢期と表記することにする。この高齢期というものは、社会的には、例えば 65 歳以上などと決められているが、ここでは生物学的な観点からロブジョイの図 2 にあるように生殖期間後＝高齢期として捉える。では、これはどこで区切られるのか、ということであるが、その区分は特に女性の場合に明確である。すなわち人間の女性に見られる閉経という現象がその時期を決定している。これは 50 歳のころである。

山崎はこの現象について次のように述べている。「閉経は人間だけに見られる不思議な現象である。なぜ、繁殖能力が消失した後何年も人間は生きるのか。類人猿の寿命は約 50 年で、繁殖能力もその直前まで旺盛である。ところが、現代人の女性は 40 代で繁殖能力が急速に衰え、50 歳前後で停止するにもかかわらず、その後 70 歳、80 歳を超えて生き続ける」。

なぜ、人間は繁殖を停止し、一方で寿命を延ばしたか、というのが人類学の疑問である。

これに対して、山崎は、ある狩猟採集民の調査において高齢の女性が若い女性よりも食物の採集量が多かったという調査報告を挙げ、年を重ねて経験が豊富なことは捕食において有利に働くということを述べている。その上で、人類学者による「祖母仮説」について説明している。すなわち、人間の女性は「自分の出産を早く停止し、若い世代の近縁者の繁殖に手を貸すことによって自らの繁殖成功度を上げた」という説である。実際、先に述べたように、人間は全く無力な乳児期、無力な「子ども期」（さらには少年期、「青年期」）という自立

していない期間が長い。そして、人間の母親は子どもを続けて出産することが可能であり、一度に文字通り手のかかる子どもたちを何人も抱えることになる。それを一対の親夫婦だけで面倒を見るというのは、きわめて困難なことであったろう。そこには、若い親夫婦を助ける「高齢者」の存在が必要であったろうと考えられるのである。

さらに山極は人間だけが集団を移っても元の集団との関係を絶たないことを指摘している。言うまでもなく、このような原家族と結びつきながら新しい家族を形成していくという特徴は、人間だけが親族、共同体という超拡大家族というべき関係を形成することを可能にした。山極も「人類の特異な生活史戦略は、家族という人類に特有な社会単位が登場してから発達したのかもしれない」と述べており、人間に特有の家族の形成とライフサイクルの特徴を結びつけて議論することは重要な論点である。

エリクソンは人間の生涯にわたるパーソナリティの発達過程をライフサイクルと呼んだ。それは、高齢期の心理的な課題には次世代への継承という側面が大きく関わると考え、世代の循環性を捉えようとしたためである。したがって、祖母や祖父と孫との関係は、単に 3 世代の繋がりがあるというだけではない。寿命という点からは、チンパンジーに 3 世代の共存は可能であろう。しかし、そこに祖父母性は認められないであろう。人類が共同体を形成しながら自分の生命的なルーツを意識できたのは、親の親である存在を祖父母として認識できたからではないだろうか。このような家族における縦横の生命的な繋がりの意識こそが、われわれの歴史意識と文化意識の基盤にあると言えるのではないだろうか。

「高齢期」を、人間に独自の時期としてもっとよく理解し、その意義について議論することが必要である。なお、近年、生物学的には海生哺乳類にも閉経があることが発見されているので、他の生物における意味についても考察することが必要である。

文献

Eccles JC (1989) Evolution of the Brain: Creation of the Self. Routledge. 伊藤正男（訳）（1990）脳の進化．東京大学出版.

Erikson EH & Erikson JM（1997）The Life Cycle Completed. W. W. Norton. 村瀬孝雄ほか（訳）（2001）ライフサイクル、その完結＜増補版＞．みすず書房.

石﨑淳一（2011）．ポスト近代パラダイムとしての「家庭学」．学際研究，67, 32－41.

石﨑淳一（2015）人間が「家族」を持つ特別の意味．En-ichi、4 月号，18－21.

李　相軒（1997）頭翼思想時代の到来―共産主義を超えて．統一思想研究院.

Siegel DJ（2012）The Developing Mind. (2nd. Ed.) The Guilford Press.

渡辺久子（2008）子育て支援と世代間伝達―母子相互作用と心のケア．金剛出版．2008.
渡辺久義（2005）科学革命としての「インテリジェント・デザイン（ID）」理論．世界平和研究，165，2－12.
山極寿一（2008）人類進化論―霊長類学からの展開．裳華房.